

CBC NEWS LETTER

Vol.6, No.2, Mar.2006



国立大学法人
小樽商科大学ビジネス創造センター

ニュースレター [Vol.6 No.2]

- I N D E X**
1. 地域貢献セミナー
 2. 産学連携研究成果報告会
 3. ビジネスEXPO2005およびイノベーションフェアin北海道2005
 4. 学生懸賞論文
 5. CBC主要日誌
 6. 投稿案内

1 地域貢献セミナーを開催

2月18日(土)に、小樽市日専連ビルにおいて小樽商科大学地域貢献セミナーを小樽市役所、小樽商工会議所、北海道中小企業同友会(しりべし・小樽支部)の後援を得て開催しました。今回の地域貢献セミナーは「大学の地域貢献活動ー大学も地元を元気にする」をタイトルに、本学がどのような地域貢献・社会貢献活動を行っているかを知って頂くことを目的に41名の参加者を得て開催しています。当日のプログラムと概要は、以下のようです。

【プログラム】

講演1 「これからの地域経営戦略論」

下川 哲央(CBCセンター長・大学院アントレプレナーシップ専攻教授)

概要:日本経済は漸く自律回復基調を鮮明にしてきた。こうした流れに乗り遅れがちな北海道経済だが、地域企業はこうした流れに乗れる新しい経営戦略と実行力が重要になる。カギはボーダレス・エコノミー化に伴う経営環境にある。わが国と北海道の貿易構造のいずれにも東アジアの比重増大が見て取れる。東アジア諸国の急速台頭、FTA(自由貿易協定)締結交渉やボーダレスな機能別分業の拡大などは地域産業の構造改革を促す力になる。企業規模、業種を問わず事例に見る「強い経営能力」には顧客に認められる「表の競争力」とそれを担保する「裏の競争力」がある。優れた顧客価値の創出と模倣困難性を確立し、競争に勝つための「位置取り戦略」を立案していくことが大切である。こうした高度なビジネス構築のためには、本学の専門職大学院ビジネススクールで社内人材を養成するルートがあるほか、CBCによる相談機能や共同研究等を通じ、本学を活用して戴ける。



下川 CBCセンター長の講演

講演2 「大学の地域貢献活動」

奥田 和重(CBC情報資料部主任・大学院アントレプレナーシップ専攻教授)

概要:本学では大学憲章で研究成果を地域社会の活性化のために還元すると宣言している。これに基づいて小樽商科大学地域連携協議会を発足させ、地域の行政組織や経済団体と連携して地域社会の活性に取り組んでいる。研究成果の社会への還元は、従来から行っている公開講座や各種委員会へ本学教員を派遣することに加えてCBCの活動として、ビジネス相談、大学発ベンチャーの設立支援、共同研究・受託研究、登録研究会などがあり、特に大学発ベンチャー設立支援は「北海道モデル」として全国に知られている。また、地域連携として高大連携事業と国際交流事業を行っている。CBCの活動を通じて明らかになったことは、社会や地域が大学に対して持っているイメージに「思いこみ」や「誤解」、「勘違い」があることである。大学の歴史を概観すれば、「大学とは何か」を理解することができ、大学の最大の社会貢献・地域貢献は課題探求型能力を持った人材を持続的に社会へ輩出することであると理解できる。したがって、地域活性化を担う主体は大学ではなく地域住民であり、地域住民が主体的に地域活性化に取り組む必要がある。

講演3 「事例発表 小樽商工会議所JAPANブランド育成支援事業-OTARU-ガラス工芸品の世界ブランド化プロジェクト」

海老名 誠 (CBC副センター長・教授)

概要:「JAPANブランド育成支援事業」「OTARU-ガラス工芸品の世界ブランド化プロジェクト」は中小企業庁からの受託事業である。小樽には多くのガラス工房があり、「小樽＝ガラス」というイメージは定着しつつあるが、これを全国ブランド、更に世界ブランドとして育成することを通じ、低迷する小樽経済の活性化につなげる事が本事業の目的である。

本事業は産学官の連携事業として位置づけられ、小樽商工会議所を事務局として、小樽商科大学・北海道工業試験場・小樽市・参加事業者などが実行委員会を構成した。本学は市場調査・展示会グループのリーダーを努め、台湾や東京でアンケートを実施し2500通を超える回答を持ち帰り、分析した。その結果、小樽のガラスは、台湾などで高い評価を得ており、今後アジアへの販売も大いに期待されることが解った。今後も本事業の継続を通じ小樽のガラス業界の発展に貢献していく。



セミナー会場の様子

2 産学連携研究成果報告

例年2月末に北海道経済の活性化に寄与するためにCBCから生まれた研究成果を公開する産学連携研究成果報告会を開催しています。本年も2月24日(金)にKKRホテル札幌を会場に開催し、70名の参加者がありました。本年は、予防医学に基づくビジネスモデルの報告以外に大学におけるキャリア教育プログラムと大学と高校の高大連携事業という教育に関する報告が2件あったのが特徴です。報告会のプログラムは以下のようです。

【プログラム】

開会の挨拶 小樽商科大学ビジネス創造センター長 下川 哲央

報告1 「予防医学対応型マンションのビジネスモデル」

報告者: 菊池 宏治氏 (アルファ計画株式会社 代表取締役)
松尾 睦 (小樽商科大学大学院アントレプレナーシップ専攻助教授)
中川 喜直 (小樽商科大学商学部一般教育系教授)

質疑応答

報告2 「キャリア教育プログラムの開発」

報告者: 益山 健一氏 (キャリアバンク株式会社取締役)
岡部 善平 (小樽商科大学商学部一般教育系助教授)
大津 晶 (小樽商科大学商学部社会情報学科助教授・
ビジネス創造センター研究部主任)

質疑応答

報告3 「小樽商科大学の高大連携事業 ～15歳からの大学入門シリーズの出版～」

報告者: 岡部 敦氏 (北海道札幌手稲高等学校教諭)
江頭 進 (小樽商科大学商学部経済学科助教授)
前田 東岐 (小樽商科大学商学部商学科助教授・
ビジネス創造センター総務部主任)
道野 真弘 (小樽商科大学商学部企業法学科助教授)

質疑応答



報告会の様子

3 ビジネスEXPO 2005およびイノベーションフェアin北海道2005

11月10日(木)と11日(金)の2日間にわたってアクセスサッポロを会場にビジネスEXPO2005と産学官連携イノベーションフェアin北海道2005が開催され、CBCもこれに出展しました。

ビジネスEXPO2005では、「ものづくり再発見」をテーマに出展し札幌ITカロツェリアの概要を解説するパネル等を展示しました。展示内容はwww.otaru-uc.ac.jp/cbc/expo2005cbc.pdfをご覧ください。

一方、産学官連携イノベーションフェアin北海道2005では、札幌医科大学と北海道東海大学との間で締結した文理融合による連携協力協定に関するパネル展示を行いました。

展示内容はwww.otaru-uc.ac.jp/cbc/innov2005cbc.pdfをご覧ください。



ビジネスEXPO2005
で来訪者に対応する
海老名CBC副センタ
ー長



産学官連携イノベーション
フェアin北海道2005で伊藤文部
科学省移転推進室長
に対応する下川
CBCセンター長

4

学生懸賞論文

小樽商科大学ビジネス創造センター研究部主任 大津 晶

平成17年度の学生懸賞論文には19編の応募がありました。昨年は26編でしたので応募総数では一昨年以前の水準に戻ったとも言えますが、大学院生の部への応募が例年1編のところ3編に増加しています。応募論文を厳正に審査した結果、学部生の部で1等1編、2等2編、3等1編、佳作1編を入選論文として選出し、大学院生の部では残念ながらすべての賞に該当なしという結論を得ました。

応募者の所属内訳を見ますと、商学10編、経済学5編、企業法学3編、社会情報学1編となっており、例年よりも商学科への偏りが大きいように思われます。したがって応募論文の分野も経営やマーケティング、企業戦略論などが目立つ結果となりました。また著者が3年生の論文が比較的高い評価を得た点も今年度の特徴と言えます。応募論文に対する審査員の評価を概観すると、着眼点の良さやテーマ設定のおもしろさ、独自に実施した調査などを高く評価するものが多い一方で、既往研究のレビュー不足や結論にいたる論理構成の弱さが指摘され、分析手法の妥当性への疑問が示されています。ひとことで言うならば「著者の信念を熱く語るあまり、やや独善的になってしまった」論文が多かったということでしょう。また例年指摘されていますが、論文の形式上の問題や誤字・脱字、規定分量の大幅な超過など、応募論文としての完成度が低いことにより、せっかく著者独自の視点や主張に光るものがありながら、総合評価を下げてしまっている面もあるようです。入選した各論文は、いずれも複数の審査員から「優れている」との評価を得たものです。

大学院生の部で入選がなかったのは、審査員全体の考え方として、「原則として1年生でも応募できる学部生の部は、なるべく良いところを評価しよう」とし、「大学院生が書く論文はやはり内容・完成度ともに一定程度の水準を期待したい」という暗黙の基準があるのかもしれない、結果的に厳しめの評価になったのではないかと考えられます。

今後学生懸賞論文に応募しようとする諸君には、独創的な着眼を大事にしつつも学術論文の作法を守って、質の高い論文を執筆していただきたいと思います。今回応募がなかった2年生以下の学生についても、早い段階で懸賞論文に応募することで良い論文の書き方を学ぶことができますので、来年度以降の意欲的な応募を望みます。最後になりましたが、本懸賞論文事業の実施にあたり、株式会社北洋銀行様より多大なるご支援をいただきました。記して謝意を表します。

審査結果

【大学院生】 各賞、該当論文なし

【学部生】

- 1等** 庄司真人(4年):「日本における金融教育の養成と普及」に関する考察
- 2等** 太田あすか(4年):中心市街地活性化を担う「チャレンジショップ」事業の成功要因－札幌市「タヌたまプラザ」と富山市「フリークポケット」を事例として
前田容子(代表・3年)・藤田琴代・稲船綾夏・本館綾香:ブライダル業界の行方
- 3等** 千明哲郎(代表・3年)・往蔵亮太・藤澤仁志:サッカーワールドカップビジネス－国内産業への影響
- 佳作** 小川亮(代表・3年)・大澤翼・高田禎久・吉田健太郎:札幌ドームの経営戦略



3月16日の授賞式にて(前列左より太田、庄司、稲船、前田の各氏、後列大津研究部主任、下川センター長、海老名副センター長、他の受賞者は欠席)

5

CBC主要日誌

C B C 運営委員会		
第7回 10月24日(月)	審議:1.旭川リサーチ&ビジネスパーク構想地域展開事業について 2.その他 報告:7件	10月3日(月)
第8回 11月21日(月)	審議:なし 報告:8件	11月7日(月)
第9回 12月19日(月)	審議:なし 報告:6件	12月5日(月)
第10回 1月23日(金)	審議:1.平成17年度年度計画の進捗状況報告と平成18年度計画(案)について 2.平成18年度科目別経費要求(案)について 報告:6件	1月10日(火)
第11回 2月20日(月)	審議:1.次期ビジネス創造センター長の選出について 2.平成18年度・年度計画(案)について 報告:5件	2月6日(月)
第12回 3月20日(月)	審議:1.ビジネス創造センター副センター長の選出について 2.ビジネス創造センター主任及びスタッフの選出について 3.ビジネス創造センターフェローの委託について 4.平成18年度CBC学外協カスタッフの委託について 5.平成18年度「知的財産活用調査分析」事業の受入れについて 報告:4件	3月6日(月)

6

投稿案内

ニュースレターはCBCに関する情報をタイムリーに開示するだけでなく、CBC関係者相互の情報交換の場でもあります。CBC関係各位の積極的な投稿をお待ちしています。

投稿、問い合わせはEメールにてお願いします。投稿は随時受け付けておりますが、投稿原稿の採否、掲載号の決定はCBC情報資料部に御一任ください。

○ 投稿先 小樽商科大学ビジネス創造センター情報資料部(奥田和重)

Eメール: okuda@res.otaru-uc.ac.jp

編集後記

このたび小樽商科大学ビジネス創造センター(CBC)のニュースレターVol.6, No.2を発行することができました。これも関係各機関・各位のご協力の賜であります。より充実したニュースレターにするために、今後ともみなさまのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(情報資料部)

国立大学法人
小樽商科大学ビジネス創造センター(CBC)
〒047-8501 小樽市緑3丁目5番21号
事務室 TEL 0134-27-5290
FAX 0134-27-5293
メールアドレス cbcjimu@office.otaru-uc.ac.jp
ホームページ http://www.otaru-uc.ac.jp/cbc/